

平成 24 年度 「学生論文賞」 第 2 次審査論文

外在的考え方の理論的検討と尺度作成の試み

小樽商科大学商学部商学科 4 年

学生番号 2009487 和田 果樹

目次

はじめに	p.3
第1章 外在的考え方の理論的検討	p.5
1-1 序論	
1-1-1 <事実>と<記号>	
1-1-2 <事実>に基づいて考えるとは何か	
1-2 外在的考え方と内在的考え方	
1-3 地図と現地	
1-4 実証的な研究	
1-5 まとめ	
第2章 外在的考え方の尺度作成	p.13
2-1 目的	
2-2 方法	
2-3 結果	
第3章 尺度の妥当性の検討	p.16
3-1 目的	
3-2 方法	
3-3 結果と考察	
まとめと今後の課題	p.18
引用・参考文献	p.19
質問紙	p.21

はじめに

外在的世界(現実世界・実際に経験する出来事の流れ)から認知した身のまわりのさまざまな物事を抽象・捨象し、その個人特有の内在的世界(頭の中の世界・記号的世界)を作り上げるという人間の自然な認知過程に着目し、それが引き起こす危険性について説いたのが S・I・ハヤカワの著書『思考と行動における言語』である。この本は一般意味論 (general semantics) について書かれたものであるが、その内容において主要なテーマとなっている「外在的考え方」「内在的考え方」は、心理学の世界では二項対立的な認知スタイルとしてとらえることができる。

本研究では、この「外在的考え方」の個人内の傾向を量的に測定するための尺度の作成を主たる目的として、論文を3部構成とした。第1章では「外在的考え方」の理論的な検討、第2章では第1章の内容に基づいた「外在的考え方」尺度の作成、第3章はその尺度の内容の妥当性を検討するための研究を行う。

「外在的考え方」とは、言語的レベルだけで考えず、その下の実在のレベルを意識しつつ思考し行動することであり、「内在的考え方」とはその逆で、言語的レベルにとらわれ、事実が頭の内にある観念に反しているときでもなお、頭の中の世界に固執した思考・行動を示すことである。言語的レベルとは、すなわち現実世界を知覚し、解釈する中で頭の内部に形成された諸々の心象や観念のことであり、それらは人間の扱う言語によって表現される。

また、上記に挙げた著書の中でハヤカワは、“意味のないコトバに影響を受けやすいこと、雄弁に熱をこめて言われた事を信じ易い傾向、事実で考えるよりも標語のようなもので考え易いこと”が人間の大部分の弱点である、と述べているが、これらは内在的考え方をする者に顕著な特徴であるといえる。

ハヤカワの知見を心理学的に解釈すると、外在的考え方の方が柔軟で適応的な認知であり、過度な内在的考え方は行き過ぎたステレオタイプや偏見、また非現実的な思い込みなど不適応的な認知・行動と関連があると考えられる。

これらの二項対立的な考え方は、それぞれ個人の認知スタイルとして位置づけられるとともに、内在的考え方から外在的考え方へと移行する心理的発達の過程を暗に含む。不適応的な信念や思い込みから脱却し、事実や経験をありのまま知覚しそれらを統合していく外在的考え方の視点を獲得していくプロセスは、教育や臨床の場面においても重要なテーマの一つであると考えられる。

このように外在的・内在的考え方という概念は、人間の認知過程についての研究である認

知心理学的観点のみならず、教育や臨床という観点を包括的に含む広い意味での人間の心理的発達という観点からとらえることで、今日の心理学的知見にも多くの示唆を与えるものであり、改めて詳細に検討されるべきであると考え、卒業論文のテーマとした。

本研究では外在的考え方および内在的考え方を個人の認知スタイルとして位置づけ、その内容を精緻化することを目的とする。

本研究の調査にご協力いただきました学生の方々に、心よりお礼申し上げます。また、ご指導と貴重なご指摘をいただきました先生方に感謝申し上げます。

第1章 外在的考え方の理論的検討

1-1 序論

1-1-1 <事実>と<記号>

人間は自らを取り巻き、また他者とも共有する現実の世界からさまざまなものを感じ取り、個人的な思考や感情の足場である頭の中の世界を形成していく。頭の中の世界を形成しているのは主に言語である。言語は、現実世界に存在するモノや事象をあらわす記号である。私たちは現実世界の中で行動を起こし、いろいろなものを見聞きし、じかに触れるなどさまざまな体験をする。それと同時に、頭の中で物事に反応したり複雑な思考をしたりするなどの心理的な過程を経験している。すなわち、私たちは現実世界と記号的世界の2つの世界を生きているということになる。本論文の中では、この二つを表すのにそれぞれ外在的世界、内在的世界という語を使用する。言うまでもなくこの二つは相互に作用しあっているが、それぞれ独立した世界として存在している。

人は他の生物と違って、「肉体的自己」よりも「記号的自己」の保存への欲求が強いといわれる。たとえば、理想的なプロポーションを手に入れるために体に負担をかけて無理なダイエットをしたり、生活費を削ってまで高級な衣服をまとったり、また大昔であれば、戦で負けそうになった時「敵の手にかかるくらいなら死んだ方がまし」という美徳的価値観から自死してしまったりする。これらの行為は、すべて「記号的自己」の保存への欲求からくるものである。もし人間が他の動物のように「肉体的に」生きていることを何にもおいて一番の欲求と考えるのであれば、このような行為はおこさないだろう。人は自分自身が抱き、また他者からも抱かれる自己のイメージ、すなわち「自己概念」を守り、高揚させることを目的として生きているのである。自己概念とは、記号的自己の事である。自分自身をあらわす記号の価値が下がることは人間にとって大きな問題であり、肉体的自己を損なっても記号的自己を守ろうとすることが、人間と他の動物との決定的な相違であると考えられる。

肉体的自己よりも記号的自己の保存欲求が先行してしまうのと同様に、人間は実際の<事実>よりも、それらを表している<記号>を用いて物を考える傾向がある。実際に、私たちは思考を行うのに「言葉」を用いている。生の経験や実物を「言葉」によって表し、それらをまた別の「言葉」によって定義し、広く人々の間で共有することによって、思考および伝達を行っている。そのため、しばしば<事実>よりも<記号>、つまり「言葉」が先行してしまうことがある。

たとえば、何かものを買う時、機能よりもデザインや商品イメージを重視する場合、それ

はその商品が実際に自分にもたらすものとして、利便性や機能性などの実質的な価値よりもその商品を身につけたり所持したりしている自己のイメージ、つまり記号的な価値を重視しているのだと言える。実際に売り手の側も、華々しい広告や人の心に訴えるコピーなどを用いて、その商品の記号的価値を高めることに余念がない。これは<事実>よりも<記号>が先行している格好の例である。他にも、<事実>と<記号>の関係について全く別の例をあげてみよう。たとえば「自分はダメ人間だ」と自己を評価する人がいる。そのような人は、自分自身に「ダメ人間」というレッテルを貼ることによって自分自身を記号化し、その<記号>に基づいて思考するようになる。つまり「ダメ人間である」という自己評価を支持するような自分自身の行動ばかり選択的に知覚するようになり、ますます「自分はダメ人間だ」という信念を強め、ついには心理的な障害まで発展する場合もある。人種間や性別間によくみられるステレオタイプも、これと似たような認知が行われている。

1-1-2 <事実>に基づいて思考するとはなにか

私たちは物事を抽象化することによって思考している。たとえば「犬」という言葉を例にとってみよう。犬にはさまざまな犬種があり、細かく分類すればたいへんな数の種類が存在する。私たちはそれらから共通の性質（「ペットとして人気である」「ワンと吠える」「忠実な性格である」など）を抽出し、その性質を持った動物をひとまとめに「犬」という言葉で呼び、頭の中に思い浮かべることができる。もちろん、あらゆる人が「犬」という言葉を聞いた瞬間にこの世に存在するすべての犬を思い浮かべるといったことなどありえなく、その時思い浮かべる具体的なイメージは個人によって異なる。自宅で犬を飼っている人は、そのペットの犬が真っ先に浮かぶだろう。子供のころ噛まれて怪我をしたなどで犬を苦手と思っている人には、何かしらの恐怖や嫌悪感をともなって想起されるかもしれない。身近に触れたこともなく、犬について何の思い入れもない人であれば、非常にぼんやりとしたイメージでしか浮かばないこともあるだろう。また、その言葉が提示された文脈によって意味が変わるのは明白である。「〇〇さんが飼っている犬」と言えばその犬のイメージははっきりと具体的になるし、誰かに向かって「負け犬」などと言えばその人を侮辱しているのだということがわかる。このように「犬」という言葉をひとつとっても、私たち一人ひとりが持つイメージは異なり、さらに文脈によって意味もがらりと変わる。それでも現に、私たちは「犬」という言葉を使って思考したり、誰かに何かを伝えたりすることができる。実際に犬をその場に連れてこなくても、「犬」という言葉を頭の中だけで操作し、すでにある知識やイメージと組み合わせ、「犬」について何か言うことができる。これは実物の犬を「犬」という言葉、ないし

記号に置き換える抽象化の過程が存在するからである。そのような抽象化が行われていないものについて、私たちは思考することができない。なぜなら、私たちは言葉を用いてしか思考できないからである。

たまたま「犬」を例にとって述べたが、これらはすべての言葉についていえることである。ただし、言葉によって抽象化の度合いが異なる。たとえば、「〇〇大学の△△学部で××サークルに所属する A さん」といえばだれを指しているかが具体的にわかるが、これを「〇〇大学の△△学部の学生」「〇〇大学の学生」「大学生」「若者」という風に抽象化のレベルを上げていくと、より多くの人がこの言葉が表すカテゴリの中に含まれていく。

人間のもっとも危険な思考過程として、事象を過度に一般化してしまうことが挙げられる。上の A さんの例を用いて説明してみよう。たとえば A さんが、毎日通学に使うバスの中で非常に態度が悪いとする。混んでいる車内で優先席に座り、立っているお年寄りが目の前にも席を譲らず、ものを食べ、携帯電話で通話をし、またイヤフォンから大きな音が漏れているのにも気づいていない。そのバスは駅から学校までの直行バスであり、利用者は高齢者などもいるが、ほとんど〇〇大学の学生である。A さんの車内での態度を見ていた同じ大学の、A さんの顔見知りでもある B さんは、「××サークルの人は常識がないからなあ」とため息をつく。同じくバスに乗っていた主婦の C さんは、「〇〇大学の学生はマナーが悪い、息子をこんな大学に行かせたくない」と思い、お年寄りの D さんは、「最近の若者はなっていない」と内心憤りを感じている。そのバスには〇〇大学の他の学生も多く乗っているが、B さんも C さん D さんも、A さんの行動にばかり注目している。よくある日常の風景である。その出来事の後、B さんは同じ大学の友人と××サークルの悪口を言いあい、C さんは大学に直接苦情を言いに行き、D さんは新聞の投書欄に最近の若者のマナーの悪さを嘆く文書を投稿した。

彼ら 3 人のここでの思考および行動は、A さん個人のしていることを A さんが所属する集団まで一般化したために起こったものである。その集団に属していてもまったく無関係な人々の心づもりを察すればこのような思考はすべきでないし、また決してすべて正しいともいえない。しかし、きわめて自然な認知過程として、私たちはそのような思考をしがちである。B さんも C さんも D さんも、自分が対象（ここでは「〇〇大学」や「若者」という大きなカテゴリ）に対して抱いた印象（ここでは悪いイメージ）を現実のものだと思い込み、多くの例外（ここでは A さん以外の〇〇大学の学生など）を無視している。物事に関して抱いた印象は言葉によって記述されるが、（例：「〇〇大学の学生は態度が悪い」）その言葉をまるで事実であるかのように心に感じてしまう傾向によって、偏見や差別行為が生じることも多くあ

る。

しかし、これらのありふれた思考様式は多くの場合、個人の努力によって克服できる問題である。どうすればいいのかというと、自分の抱いている諸々のイメージや信念をたえず現実の世界、つまり「外在的世界」の〈事実〉と照らし合わせ、適宜修正していくことである。この例においてBさん、Cさん、Dさんのすべきことは、Aさんの行動から抱いた嫌なイメージをここではAさん個人の行動に対する印象としてとどめておき、過度に一般化しないことである。なぜならこの件についてAさん個人は責められてしかるべきであるが、Aさんの行為とAさんの所属する集団のほかの人々とは無関係だからである。仮にその集団の中でAさんと同じようなことをしている人がほかにも多くいることがわかったとしても、その集団全員がAさんと同じだと判断するのは早計である。その集団一般に関する〈事実〉がはっきりとするまで、例外があるということも心に留めておかねばならない。もっとも、「〇〇大学」「若者」などという広いカテゴリに属する全ての成員についての実情を検証することなど土台不可能なので、どのみちそのイメージはぼんやりとしたものになる。本来そのように曖昧であるはずのイメージを明確な記号としてとらえ、言葉によって断じてしまうことにより、その記号にとらわれた思考をしてしまい、偏見や差別が生じてしまうことが考えられる。自分が抱いたイメージに反する例外の存在も同じように考慮して初めて、より〈事実〉に近似した思考ができ、偏見が起こる可能性も減少する。自分自身の頭の中にあるイメージ、つまり「内在的世界」に反する事実にまできちんと目を向け、それらを拒否することなく受け入れて、たえず「内在的世界」に反映させていくことが重要となる。

1-2 外在的考え方と内在的考え方

自らの頭の中の世界である内在的世界を、自分自身を取り巻く純粹なく〈事実〉で構成された外在的世界の様相に近づけていこうとする態度を「外在的考え方 (extensional orientation)」という。その対極は、「内在的考え方 (intensional orientation)」である。内在的考え方とは、「内在的世界」に存在する心象や観念ないし〈記号〉にとらわれ、外在的世界を構成する具体的でありのままの〈事実〉を見ようとしない心の傾向であり、それらは偏見や差別意識、また現実に対応しない認知を招くと考えられる。

これら二つの考え方の傾向は、二項対立的な認知スタイルと捉える事が出来る。簡潔に表現すると、〈事実〉に基づいた思考をするか、〈記号〉に基づいた思考をするかという分類の仕方が可能であろう。〈事実〉をたえず重視する外在的考え方をしていれば、常にその人の内在的世界は外在的世界に対応したものとなり、誤った信念や偏見にとらわれることもな

く、柔軟で現実適応的な認知が可能となる。そして、ひとつひとつの〈事実〉をしっかりと知覚できることで、現実の世界の複雑性や曖昧性に対応することができる。反対に〈事実〉を無視または軽視し、自分自身の作り出した〈記号〉および内在的世界での経験にばかりとらわれる内在的考え方をしている、非現実的な思い込みに苦しめられたり、無実の人々を偏見の目で見てしまったりすることにつながる。現実世界のたえまない変化に対応できず、古い考えをいつまでも持つことにも繋がる。また、カーロ（2011）は、内在的考え方とは人が抽象度の高い言葉を用いて自分の世界を解釈することを意味する、と述べている。抽象度が高いということはそれだけ具体性に欠けると言うことであり、そのような言葉を多く用いることによって〈事実〉に基づかない思考に繋がってしまうと考えられる。

ただし、外在的考え方は内在的考え方よりも、認知的資源をより多く必要とすることが考えられる。私たちは思考に使う労力を節約するためにカテゴリ化に基づく情報処理（上野,2002 参照）を行うが、外在的考え方はなるべくそのようなカテゴリに基づいた情報処理を避け、ありのままとらえようとする傾向が強いからである。カテゴリに基づかず、ひとつひとつの個別の事象について検討することは認知的コストがかかる。それゆえに、多くの人には内在的考え方に陥りがちでもある。しかし、だからといってカテゴリに準じた情報処理をしてはならないということではない。その自らが分類した「カテゴリ」や抽象的であいまいな概念（たとえば「いまどきの若者」など）が〈絶対的〉なものだと思込むことが問題なのである。現実の情報処理でも、カテゴリに反する情報を考慮して再カテゴリ化（上野,2002 参照）が行われることはあるが、そもそもそのカテゴリ自体も抽象的な概念も、〈事実〉の世界、すなわち外在的世界にあらかじめ〈絶対的〉なものとして存在しているのではなく、情報を処理する側が便宜上設けたものでしかないということに留意せねばならない。そうでないと、内在的考え方に陥ることになる。

1-3 地図と現地

- ・記号は物そのものではない (The symbol is not the thing.)
- ・コトバは物ではない (The word is not the thing)
- ・地図は現地ではない (The map is not the territory it stands for.)

一般意味論の創始者であるアルフレッド・コージブスキーが著書『科学と正気』(Science and Sanity,1933) の中で用いている有名な比喩を用いると、「内在的世界」と「外在的世界」との関係は、「地図」とそれが表わす「現地」との関係に似ている。この比喩で言えば、私たちは「地図」を使って、「現地」を旅し、また「現地」についての「地図」を作成することを

自動的に行っている。その自ら作り出した「地図」は、私たちが同じものを見ていても人それぞれ違う視点で見たりさまざまな感じ方をしたりするのと同じで、意図的か否かにかかわらず、主観的な色合いを帯びる。そのため、自分自身の「地図」が広く一般的に適用されるものだと思いつくのは危険なことである。

また、「現地」はたえず変化しているが、「地図」はその変化に自動的に対応するものではない。そのため、一度作られた地図はいずれ古くなり使えなくなる可能性もある。古くなった誤りの地図を用いて現地を旅すれば道に迷う可能性がある。つまり、身のまわりを取り巻く現実（外在的世界）の変化に頭の中の観念（内在的世界）は自動的には対応しないので、いつの間にかその二つが著しく乖離していることもありうるということである。

以下はハヤカワ（1985）の引用である：

子供が青年に達し、経験の拡大とともに自分の周囲に見出す外在的世界とかなり密接に対応する言語的世界(引用者注：内在的世界のこと)を頭に収めていれば、かれは自分で見出した事に驚いたり傷ついたりする危険が比較的小さくてすむ。それは、彼の言語的世界が、どんなことに行き当たるかを前もって多少なりとも彼に知らせてくれるからである。かれは、人生への備えができています。ところが、もし、かれが頭にアヤマリの地図を持って成長すると一すなわち、アヤマリの考えと迷信で頭がいっぱいになっていると一かれはいつも困難に出会い、努力を空費し、バカみたいなおこないをする。かれはあるがままの世界に適応できず、もし適応不全 (lack of adjustment) がはなはだしいとついには精神病院行きということになる。

1-4 実証的な研究

「外在的考え方」の現実的な効用を実証する研究として、外在的考え方およびその大元となる一般意味論の原理を用いた LTE (Linguistic Therapy of Evaluation) の事例研究がある。カーロ(2011)によると、一般意味論の中心的な命題は「言語が私たちの認識プロセスに大きく影響する」であり、<事実>の構造により近似させる言語表現の習得を重視する。LTE は人の認知そのものではなく「言語」を強調し、言語の使い方を変えることによって心理的な症状を改善していこうとするものである。<事実>世界と<言語>世界の構造の違い、つまり現地と地図の違いを理解することが、LTE による治療の中心を占める。以下はカーロ(2011) の論文で紹介されている事例を参照しながら進めたい。

パフォーマンス不安を抱えた学生のガブリエルに LTE を施したところ、症状が全快した。

彼の主要な症状は、動悸、筋肉痛、リラックスできないこと、神経質、くよくよ考えること、パフォーマンスに関する様々なネガティブな予断などだった。ガブリエルは自らの思考のパターンとして、内在化¹、予断²、および同一化³を行っていた。彼は主に学業に関する不安を持っていたが、たとえば彼は勉強しなかった時、勉強しなかったという<事実>に着目せず、勉強しなかったことについて延々と内在化したり予断したりして、あれこれと思いつめぐらし、不安を抱えていた。彼は彼自身の<事実>に基づかない高い抽象レベルによる思考、つまり内在的考え方をしていることによって心理的な症状を訴えていたのである。

ガブリエルが受けた治療は、彼自身の内在的考え方を改め、外在的考え方を習得させるためのものであった。LTEの主な治療技法は、①言葉と<事実>の違いを強調すること（「地図」と「現地」の違いを強調すること）、②一般意味論に基づく討議、③抽象の階層に注目することである。なお、LTEの治療の具体的な技法については、本論の趣旨からずれてしまうので省略したい。

治療を始めた当初は頻繁にネガティブな自動思考をし、前述した内在化・予断・同一化が無意識の習慣となっていた彼であったが、しだいに言葉（地図）と<事実>（現地）の違いに気付き、自らの言語表現、および考え方を修正するようになった。日常の様々な場面で、学業に対する不安から内在的考え方に陥りそうになっても、「事実に戻れ」との自己指針から、「今、ここ」で自分が何をしているのか、何を感じているのかに着目した言語表現によって、予断したり無駄に考えを巡らせたりすることを回避できるようになった。そして、不安にさいなまれることなく、目下達成しなければならない課題のための具体的なひとつひとつの作業に集中できるようになった。

治療を通じて、彼は内在的考え方から外在的考え方へと、明らかに変化を示した。それは、内在化・予断・同一化をやめ、たえず「今、ここで」の<事実>に注目することによって達成されたのである。治療と約2年間のフォローアップの結果、彼の症状は全快した。

予断することは悪いことのようにであるが、LTEの基本的考え方の一つに、人間は予断するものである、ということがある。したがって私たちは、予断は予断として扱わなければならない。予断を<事実>のように扱ってしまうと、それは同一化をしていることになる。たと

¹内在化（intensionalization：「決して～ない」「いつも」「すべての」「～なければならない」といったく絶対的>な表現。例「僕は苦痛を伴わずに勉強しなければならない」「エラスムス奨学金が取れるか取れないかにすべてがかかっている」）

²予断（anticipation：速断したり、<事実>より言葉を優先すること。例「僕は今年、時間を浪費してしまっている」「僕は自分で決めたことをやり遂げることができない」）

³同一化（identification：<事実>と言葉を同一視すること、自己ラベリングなど。例「僕は怠惰な人間だ」「勉強しないので僕は悪い人間だ」）

えば、「私は～できない」と「私は～できないと感じる」という表現のあいだには大きな隔たりがある。「私は～できない」と決めつけることは予断であり、ひいては「私は無能だ」といったような同一化につながる危険性がある。「私は～できないと感じる」という表現をすれば、自らの予断に気づき、自分が予断をしたという<事実>に注目することができる。そうして、ひとつひとつの自分自身の言語表現を、より<事実>に近似した構造に近づけていくことにより、内在的考え方による思考のどうどう巡りから脱却し、<事実>を基点とした外在的考え方を獲得していくことができるとされている。「現地」の様相により近い「地図」を描くには、「地図」ばかり見つめているのではなく、何よりもまず「現地」に赴き、現地はどのような様子か、何が起きているかということに基づいて地図を作成しなければならない。

このガブリエルの事例からわかることは、内在的考え方による思い込み傾向が自己へ向いた時、感情の問題や心理的な障害にまで発展するということ、そしてそれらの問題は外在的考え方によって克服できる場合があるということである。LTE が本来不安とうつ病の治療のために開発された認知療法である(カーロ,2011) ことからわかるように、人間の不安や抑うつ感情は、その人が経験した何かしらの衝撃的な<事実>からではなく、それにとまなう自らの思いこみ、つまり内在化・予断・同一化から生じる場合が多い。LTEに限らず、論理療法(REBT: Rational Emotive Behaviour Therapy) と呼ばれる認知療法では、表出した症状そのものでなく、症状を作り出したとされるその人自身の不適応的な信念(イラショナル・ビリーフ) に焦点を当てる(ドライデン,1998 参照)。LTE は特にその人の言語的な習慣を改善することに焦点を合わせたものであるが、それらを改めることが不適応的な信念を改めることにつながったものと考えられる。すなわち、内在化・予断・同一化に侵された言語的習慣を改め、<事実>に基づく記述をするように変化させることにより、その人の信念のあり様をも変容させることが可能になるのである。

1-5 まとめ

以上のように、外在的考え方とは、<事実>に基づく、すなわち「地図」を常に「現地」の様相に近づけていこうとする思考の傾向のことである。1-4 で参照したカーロ(2011) の事例からもわかるように、外在的考え方をすることにより、不適応的な思い込みや、自分自身や他者を貶めるような思考に陥ることを防ぐことができると考えられる。

2章では、外在的考え方の個人差を把握できる尺度の開発を目指す。なお、尺度作成においては、外在的考え方は領域固有的ではなく、領域普遍的なものであることを仮定して研究を進める。

第2章 外在的考え方の尺度作成

2-1 目的

これまでの先行研究では、1章で論じたような外在的考え方の個人差を把握できるような尺度の開発はなされていなかった。したがって本研究では、個人の外在的考え方の傾向を定量的に把握できる尺度の作成を目的とする。

2-2 方法

被験者 某国立大学の学生 175名(18~23歳、平均年齢 19.88歳)を対象とした。性別の内訳は男性 97名、女性 75名、未記入 3名であった。そのうち回答に記入漏れのあった1名を除いた 174名を分析の対象とした。

調査時期 2012年7月

項目 尺度を構成する項目は、外在的考え方をする人の行動や思考・感情の特徴と考えられる傾向を参考文献などに基づき選定し、筆者が自作した。項目を作成する際、どの程度<事実>に基づいて考えられているか、自らの思いこみや感情に左右され非適応的な行動をしていないか、物事を速断せず、落ち着いて考えられているか、<事実>の多様性の意識などの観点に着目した。

手続き 上記の 65 個の項目に加え、第3章の研究で用いる 2 つの尺度および自由記述 2 問から成る質問紙を作成した。回答は、一般教育科目の心理学の講義中に配布・回収したものが 148 名、後日回収した者が 27 名である。回答は、「外在的考え方」尺度および 3 章で用いる 2 つの尺度全てにおいて「全く当てはまらない」「非常に当てはまる」を両極においた 1 点~6 点の 6 件法で求めた。得点が高いほどその項目に当てはまる度合いが高いことを示す。

2-3 結果

因子分析 (表 1 参照)

逆転項目はあらかじめ処理し、上記の 65 項目について主因子法による因子抽出とプロマックス法による回転を行った。因子数は、固有値 1 以上の基準では 4 因子であったが、因子の解釈の可能性より判断し 3 因子を選択し、負荷量が .35 未満の項目を除外した。このような方針による因子分析を繰り返した結果、65 項目中 30 項目が最終的に採択された。

第 1 因子(項目の数 12、平均値 47.50、SD=8.70)は、「A13 問題に直面したとき、その根本的な要因は何かつきとめてから判断する」、「A22 何かについて判断を下したとき、その判断に至った過程をよく分析する」、「A18 物事の背景についてよく考える」などの項目の負荷量が高いことから、「問題解決志向と知的欲求」と命名した。物事を早計に判断せず、<事

実>世界の様々な情報についてよく考えることで問題を解決していこうとする傾向であると解釈できる。第2因子(項目の数10、平均値31.10、SD=8.65)は、「A54 一度悩み始めてしまふとなかなか抜け出せず、悪循環に陥る(逆転項目、以下逆)」「A19 同じことで何度も悩んでしまうことが多い(逆)」「A55 ひとつの考えにこだわってしまい、周りが見えなくなることがよくある(逆)」などの項目が高い因子負荷量を示した。思い込みや、頭の中でぐるぐると考え思い詰めてしまうことから脱却できるということと解釈し、「脱・循環的思考」と命名した。第3因子(項目の数8、平均値30.31、SD=6.39)は、「A60 人と口論になる、またはその寸前まで至ることがよくある(逆)」「A35 他人の言うことを素直に聞き入れられないことが多い(逆)」「A25 感情的にならないように気を付ける」の項目が高い因子負荷量を示した。自らの感情を統制し他者と円滑なコミュニケーションをとろうとする傾向であると解釈し、「対人感情のコントロール」と命名した。それぞれの因子の信頼性は、問題解決志向と知的欲求 $\alpha=.84$ 、脱・循環的思考 $\alpha=.81$ 、対人感情のコントロール $\alpha=.73$ であった。以上の3因子30項目を「外在的考え方尺度」とする。

相関分析

因子得点の相関は、因子1「問題解決志向と知的欲求」と因子2「脱・循環的思考」が-.141、因子1「問題解決志向と知的欲求」と因子3「対人感情のコントロール」が.104、因子2「脱・循環的思考」と因子3「対人感情のコントロール」が.301であり、因子2と3に弱い相関があった。みずからの「地図」にこだわり、思いこみを強めることによる苦しみから脱却できると、対人場面で感情的にならないよう自分を律する力があることは関係があるということが、この結果から予測できる。一方、因子1は他の2つの因子との相関がほとんどなく、他の因子から比較的独立した特性であると解釈できる。物事をよく分析することと、感情や思考をコントロールすることはあまり関係性がないという解釈もできるが、そう結論づけるには今後さらなる検討が必要であろう。なぜなら、きわめて一般的な意味において、自分で自分の感情や思考の制御ができないことは思慮の欠如とみなされることが多く、必ずしも因子1で示すような物事の分析志向性と感情や思考の問題とは関係がないとは言いきれないからである。

表1 外在的考え方尺度65項目の因子分析結果 (主因子法・プロマックス回転)

	因子		
	1	2	3
1. 問題解決志向と知的欲求 ($\alpha = .84$)			
A13 問題に直面したとき、その根本的な要因は何かつきとめてから判断する	.722	.034	.047
A22 何かについて判断を下したとき、その判断に至った過程をよく分析する	.663	.061	-.160
A18 物事の背景についてよく考える	.591	-.107	-.006
A51 自分自身についてよく分析する	.558	-.239	.128
A63 さまざまな分野に対する好奇心が強い方だ	.551	-.022	-.085
A11 悩んだときは、同時にその具体的な解決法を考える	.545	.197	.093
A64 想像に反することが起こった時でも、うまく対処できる	.511	.254	.065
A34 失敗しても、その経験を次の機会に活かすことができる	.502	.113	.195
A32 自分の人生が豊かになるような、いろいろな経験をしてみたいと思う	.499	-.080	.038
A20 他の人がなぜそういう考えに至ったのかについて考える	.478	-.261	.193
A2 似ているように見えるものでも、その違いを意識する	.476	.215	-.075
A21 世の中の仕組みをもっとよく知りたいと思う	.474	-.178	-.033
2. 脱・循環的思考 ($\alpha = .81$)			
A54 一度悩み始めてしまうとなかなか抜け出せず、悪循環に陥る	.086	.775	-.020
A19 同じことで何度も悩んでしまうことが多い	-.066	.684	-.094
A55 ひとつの考えにこだわってしまい、周りが見えなくなることがよくある	.029	.600	.231
A58 いったん気持ちが落ち込むと、自分は一生このまま立ち直れないんじゃないかと思う	.073	.549	.136
A9 味方だと思っていた人に裏切られるのは、どんな些細なことでも耐えられない	.010	.538	-.109
A31 予期せぬ環境の変化や、未知のものに対し、恐怖を感じない	.255	.505	-.266
A24 思い込みが激しい方だ	-.114	.466	.202
A39 「友達」または「仲間」だと思った人には、どんな時でもやさしくしたいと思う	.031	.453	-.320
A33 ちょっとしたことでも腹が立ったり、悲しくなったりする	-.171	.445	.300
A57 自分が今まで持っていた価値観や信念が揺らいでしまうのが怖い	-.201	.399	.203
3. 対人感情のコントロール ($\alpha = .73$)			
A60 人と口論になる、またはその寸前まで至ることがよくある	-.117	-.234	.686
A35 他人の言うことを素直に聞き入れられないことが多い	-.041	.090	.639
A26 独断的で頑固な態度にならない	.170	.051	.533
A25 感情的にならないように気を付ける	.250	-.056	.506
A59 人に対する好き嫌いが激しい	-.072	.127	.476
A28 人と話すときは、言葉を慎重に選ぶ	.026	-.078	.399
A62 嫌いな人には、何をされても不快だ	-.005	.163	.387
A30 人の意見や話は必ず最後まで聞く	.147	-.045	.376
因子間相関			
1. 問題解決志向と知的欲求	—	-.141	.104
2. 脱・循環的思考	-.141	—	.301
3. 対人感情のコントロール	.104	.301	—

Note. —は逆転項目を示す。

男女間比較

外在的考え方の合計得点に基づき t 検定を行ったところ、男女間に有意な差は見られないことがわかった。また、因子ごとに該当する項目の合計による下位尺度得点を算出し、同じ手続きで t 検定を行ったが、すべてにおいて有意な差は見られなかった。

第3章 尺度の妥当性の検討

3-1 目的

この章では、2章で作成した3因子30項目から成る「外在的考え方尺度」の構成概念妥当性を検証するための研究を行う。

3-2 仮説と方法

神山・藤原(1991)の「認知欲求尺度」と、増田(1994;1998)の「心理的健康と関連する曖昧さ耐性尺度」の2つの尺度と、2章で作成した「外在的考え方」尺度およびその3つの下位尺度の相関係数を算出することによって、その妥当性を検証する。第2章2-2でも書いたが、2章の尺度作成のための研究で配布した質問紙にこの2つの尺度を同時に記載して同じ被験者に回答を求めたため、2章のデータをそのまま使用する。

「認知欲求尺度」は、その人が普段からどれだけちゃんと考えたり、それを楽しんだりする動機づけがあるかの個人差を測定するものであり、Cacioppo & Petty(1982)が作成した34項目からなる認知欲求尺度の日本語版である。この認知欲求は、外在的考え方をするために必要であると考えられることができる。なぜなら、外在的考え方をするためには多くの認知的コストを必要とするため、認知欲求、つまり情報を処理しようとする動機づけが高いことが重要だと考えられるからである。

「心理的健康と関連する曖昧さ耐性尺度」(以下曖昧さ耐性)は、曖昧な状況に認知的に耐えられるかどうかの個人差を測定するものであり、特に心理的ストレスとの関連に注目して作成されたものである。外在的考え方をする人は、<事実>の多様性を認め、そのような現実の曖昧性によく耐えることができるものと考えられる。反対に、現実世界の複雑性や曖昧性を理解せず、短絡的に物事を判断しようとする内在的考え方をする人は、この曖昧さ耐性が低いものと考えられる。

以上をまとめて、「外在的考え方得点が高い者は認知欲求得点が高い(正の相関がある)」「外在的考え方得点が高い者は曖昧さ耐性が高い(同)」という2つの仮説を検証することによって「外在的考え方」尺度の構成概念妥当性を検討する。

なお、この認知欲求尺度の信頼度は $\alpha=0.883$ であり十分な信頼度であると判断したため、神山・藤原(1991)の論文の中で使用されている15項目をそのまま使用した。しかし、曖昧さ耐性尺度は、信頼度を向上させるため「セールスマンに会うと、何を売っているか知りたがる」の項目を除外した23項目について分析をおこなった。処理前の α 係数は.802、処理後は $\alpha=0.811$ であった。

相関係数を算出する際、項目数の違いによる合計得点の差をなくすため、「外在的考え方」

「認知欲求」「曖昧さ耐性」「因子1 問題解決志向と知的欲求」「因子2 脱・循環的思考」「因子3 対人感情のコントロール」の各項目の得点をそれぞれ合計し、項目数で割った平均得点を分析に用いた。

3-3 結果と考察

表2に示した通り、「外在的考え方」は、「認知欲求」「曖昧さ耐性」と、それぞれ.38、.51と1%水準で有意な相関があった。第1因子である「問題解決思考と知的欲求」は、それぞれ.65、.03で、認知欲求得点との相関のみ1%水準で有意であった。第2因子である「脱・循環的思考」は、それぞれ-.02、.63で、曖昧さ耐性得点との相関のみ有意であった。第3因子である「対人感情のコントロール」は、それぞれ.15、.25で、第2因子と同じく、曖昧さ耐性得点との相関のみ1%水準で有意であった。

以上の結果からわかるように、2章で作成した「外在的考え方」尺度の得点は認知欲求、曖昧さ耐性ともに有意な正の相関があった。この結果から、3-2で述べた2つの仮説は立証されたものとする。外在的考え方尺度を構成する下位尺度について見ていくと、第1因子「問題解決思考と知的欲求」と認知欲求には.65と高い相関がみられた。このことから、外在的考え方の問題解決志向と、頭を使うこと、つまり情報を処理しようとすること自体への動機づけとは関連があると考えられる。また、第2因子「脱・循環的思考」と曖昧さ耐性には.63とこちらも高い相関がみられた。いつまでも同じことでくよくよと悩んだり、思いこみで物事を判断したりしない人は、現実世界の曖昧性に耐える力が高いという解釈ができる。第3因子「対人感情のコントロール」も、曖昧さ耐性と.25の有意な弱い相関があった。曖昧さへの耐性の強さと対人感情の統制との関係性がうかがえる。曖昧さ耐性が対人場面での感情にどのように影響を与えるのか、検証の必要があるだろう。

表2 外在的考え方および下位尺度得点と認知欲求、曖昧さ耐性得点との相関係数

		外在的考え方	認知欲求	曖昧さ耐性	因子1 問題解決志向と知的欲求	因子2 脱・循環的思考	因子3 対人感情のコントロール
外在的考え方	Pearsonの相関係数	1	.379**	.507**	.500**	.650**	.756**
	有意確率(両側)		.000	.000	.000	.000	.000
	N	172	168	172	172	172	172
認知欲求得点	Pearsonの相関係数		1	.197**	.654**	-.023	.145
	有意確率(両側)			.010	.000	.770	.059
	N		171	171	168	171	171
曖昧さ耐性得点	Pearsonの相関係数			1	.033	.633**	.245**
	有意確率(両側)				.666	.000	.001
	N			175	172	175	175

**、相関係数は1%水準で有意(両側)。

*、相関係数は5%水準で有意(両側)。

まとめと今後の課題

本研究では、外在的考え方の理論的検討（1章）と、外在的考え方の個人差を定量的に把握するための尺度作成（2章）、およびその尺度の構成概念妥当性を検証するための研究（3章）を行った。

尺度作成においては、因子分析により3つの下位尺度が得られた。信頼性に関しては、尺度として使用可能であることを示す結果が示された。ただし、今後再検査信頼性を確認する必要がある。構成概念妥当性に関しては、神山・藤原(1991)の認知欲求尺度、増田(1994;1998)の心理的健康と関連する曖昧さ耐性尺度との関連を検証したことによって示されたが、まだ十分に検討がなされたとは言い切れない。今後もさらなる検討が必要であろう。

外在的考え方の尺度を作成したことにより、従来の先行研究ではなされてこなかった外在的考え方の個人差の測定を試みたことに本研究の意義があると考えられる。我が国においては外在的考え方という認知スタイルについての先行研究が乏しく、また一般の人々にもほとんど知られていないのが現状である。今後さらに詳細な検討をしていくためには、外在的考え方という概念の定義をより明確で扱いやすいものにし、一般化していくことが重要だと考える。

より多くの人々が「地図」と「現地」の違いに気づき、〈事実〉に基づいた健康的な思考をするために、本研究が役に立てば幸いである。

引用・参考文献

- ・ Cacioppo, J.T. & Petty, R.E. 1982 The need for cognition. *Journal of Personality and Social Psychology*, 42, p.116-p.131
- ・ Devine, P.G. 1989 Stereotypes and prejudice: Their automatic and controlled components. *Journal of Personality and Social Psychology*, 56, p.5-p.18
- ・ Martin H. Levinson 2011 A Continuing Education Guide to Teaching General Semantics INSTITUTE OF GENERAL SEMANTICS (<http://www.generalsemantics.org/>)
- ・ S・I・ハヤカワ著 大久保忠利訳 1985年『思考と行動における言語』原著第四版 岩波書店
- ・ S・I・ハヤカワ著 四宮満訳 1972年『言語と思考』南雲堂
- ・ ウィンディ・ドライデン著 1998年 國分康孝・國分久子・國分留志訳『論理療法入門』川島書店
- ・ 上瀬由美子著 2002年 『セレクション社会心理学-21 ステレオタイプの社会心理学—偏見の解消に向けて—』サイエンス社
- ・ 吉田悟 2011年 「一般意味論派認知療法 (LTE) の実践: ガブリエルの事例」論文の意義 日本人生哲学感情心理学会 (J-REBT) REBT 研究 第2巻第1号 p.77-p.79
- ・ イサベル・カーロ 吉田悟訳 2011年 一般意味論派認知療法 (LTE) の実践: ガブリエルの事例 日本人生哲学感情心理学会 (J-REBT) REBT 研究 第2巻第1号 p.81-p.99
- ・ 増田真也 1994年 曖昧さに対する耐性と抑うつ・不安傾向との関連 日本性格心理学会大会発表論文集(3), p.15 日本パーソナリティ心理学会
- ・ 増田真也 1998年 曖昧さに対する耐性が心理的ストレスの評価過程に及ぼす影響 茨城大学教育学部紀要 人文・社会科学・芸術 47, p.151-p.163
- ・ 神山貴弥・藤原武弘 1991年 認知欲求尺度に関する基礎的研究 社会心理学研究第6巻第3号 p.184-p.192
- ・ 田村圭祐・米沢好史 2005年 思い込み態度尺度構成の試み 和歌山大学教育学部紀要教育科学 第56集 p.19-p.31
- ・ 廣岡秀一・小川一美・元吉忠寛 2000年 クリティカルシンキングに対する志向性の測定に関する探索的研究 三重大学教育学部研究紀要 (教育科学) 第51巻 p.161-p.173
- ・ 中西良文・廣岡秀一・横矢祥代 2006年 動機づけと社会的クリティカルシンキングと

の関連：大学生の「感じる力」と「考える力」 三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 p.57-p.66

- ・ 牧野由美子 2000年 一般意味論の学習は人を幸せにするか？—主観的幸福感と思考の情緒値に対する一般意味論の効果— 聖徳大学児童学研究紀要 2 p.13-p.17 堀洋道監修・山本真理子編『心理測定尺度集Ⅰ 人間の内面を探る<自己・個人内過程>』サイエンス社

大学生の価値観に関する調査

皆さんこんにちは。私は心理学部3年1組に所属している1年生の調査員と申します。この世、卒業後何者かになり、将来の生活のイメージについて考えることは必要だと思います。そして、皆さん自身の内面から何が起きているのか、価値観が自分・周囲に与える影響について、是非とも考えてみたいと思います。是非とも皆さんの意見を伺いたいです。

学年 年齢 性別 男・女

1. 以下の文章を読み、当てはまるものに○印をつけてください。

文章	1	2	3	4	5	6
1 人が活躍するより、その周囲の人々に喜ばれる方がよい	1	2	3	4	5	6
2 現れているように見えるものでも、その裏には裏がある	1	2	3	4	5	6
3 神は、人間を導くべきではない	1	2	3	4	5	6
4 知識や技術は、人を救うための道具である	1	2	3	4	5	6
5 知識や技術は、人を救うための道具である	1	2	3	4	5	6
6 知識や技術は、人を救うための道具である	1	2	3	4	5	6
7 物事は、いつも悪い方向に進んでいく	1	2	3	4	5	6
8 正しいことを信じているだけで、よく働く	1	2	3	4	5	6
9 正しいことを信じているだけで、よく働く	1	2	3	4	5	6
10 正しいことを信じているだけで、よく働く	1	2	3	4	5	6
11 自分が正しいと信じているだけで、よく働く	1	2	3	4	5	6
12 自分が正しいと信じているだけで、よく働く	1	2	3	4	5	6
13 自分が正しいと信じているだけで、よく働く	1	2	3	4	5	6
14 自分が正しいと信じているだけで、よく働く	1	2	3	4	5	6
15 自分が正しいと信じているだけで、よく働く	1	2	3	4	5	6
16 自分が正しいと信じているだけで、よく働く	1	2	3	4	5	6
17 自分が正しいと信じているだけで、よく働く	1	2	3	4	5	6
18 自分が正しいと信じているだけで、よく働く	1	2	3	4	5	6
19 自分が正しいと信じているだけで、よく働く	1	2	3	4	5	6
20 自分が正しいと信じているだけで、よく働く	1	2	3	4	5	6
21 自分が正しいと信じているだけで、よく働く	1	2	3	4	5	6
22 自分が正しいと信じているだけで、よく働く	1	2	3	4	5	6
23 自分が正しいと信じているだけで、よく働く	1	2	3	4	5	6
24 自分が正しいと信じているだけで、よく働く	1	2	3	4	5	6
25 自分が正しいと信じているだけで、よく働く	1	2	3	4	5	6
26 自分が正しいと信じているだけで、よく働く	1	2	3	4	5	6
27 自分が正しいと信じているだけで、よく働く	1	2	3	4	5	6
28 自分が正しいと信じているだけで、よく働く	1	2	3	4	5	6
29 自分が正しいと信じているだけで、よく働く	1	2	3	4	5	6
30 自分が正しいと信じているだけで、よく働く	1	2	3	4	5	6

文章	1	2	3	4	5	6
31 知識や技術は、人を救うための道具である	1	2	3	4	5	6
32 知識や技術は、人を救うための道具である	1	2	3	4	5	6
33 知識や技術は、人を救うための道具である	1	2	3	4	5	6
34 知識や技術は、人を救うための道具である	1	2	3	4	5	6
35 知識や技術は、人を救うための道具である	1	2	3	4	5	6
36 知識や技術は、人を救うための道具である	1	2	3	4	5	6
37 知識や技術は、人を救うための道具である	1	2	3	4	5	6
38 知識や技術は、人を救うための道具である	1	2	3	4	5	6
39 知識や技術は、人を救うための道具である	1	2	3	4	5	6
40 知識や技術は、人を救うための道具である	1	2	3	4	5	6
41 知識や技術は、人を救うための道具である	1	2	3	4	5	6
42 知識や技術は、人を救うための道具である	1	2	3	4	5	6
43 知識や技術は、人を救うための道具である	1	2	3	4	5	6
44 知識や技術は、人を救うための道具である	1	2	3	4	5	6
45 知識や技術は、人を救うための道具である	1	2	3	4	5	6
46 知識や技術は、人を救うための道具である	1	2	3	4	5	6
47 知識や技術は、人を救うための道具である	1	2	3	4	5	6
48 知識や技術は、人を救うための道具である	1	2	3	4	5	6
49 知識や技術は、人を救うための道具である	1	2	3	4	5	6
50 知識や技術は、人を救うための道具である	1	2	3	4	5	6
51 知識や技術は、人を救うための道具である	1	2	3	4	5	6
52 知識や技術は、人を救うための道具である	1	2	3	4	5	6
53 知識や技術は、人を救うための道具である	1	2	3	4	5	6
54 知識や技術は、人を救うための道具である	1	2	3	4	5	6
55 知識や技術は、人を救うための道具である	1	2	3	4	5	6
56 知識や技術は、人を救うための道具である	1	2	3	4	5	6
57 知識や技術は、人を救うための道具である	1	2	3	4	5	6
58 知識や技術は、人を救うための道具である	1	2	3	4	5	6
59 知識や技術は、人を救うための道具である	1	2	3	4	5	6
60 知識や技術は、人を救うための道具である	1	2	3	4	5	6
61 知識や技術は、人を救うための道具である	1	2	3	4	5	6
62 知識や技術は、人を救うための道具である	1	2	3	4	5	6
63 知識や技術は、人を救うための道具である	1	2	3	4	5	6
64 知識や技術は、人を救うための道具である	1	2	3	4	5	6
65 知識や技術は、人を救うための道具である	1	2	3	4	5	6
66 知識や技術は、人を救うための道具である	1	2	3	4	5	6
67 知識や技術は、人を救うための道具である	1	2	3	4	5	6
68 知識や技術は、人を救うための道具である	1	2	3	4	5	6
69 知識や技術は、人を救うための道具である	1	2	3	4	5	6
70 知識や技術は、人を救うための道具である	1	2	3	4	5	6

ウラ面に続きます。

7. 今後の自分の自身の価値観や考え、もの見方などに周囲の人にどのような影響を及ぼすか？また、それほどのよう
 な影響が及ぼすか？答えられれば周囲にお答えください

質問	回答	回答	回答	回答	回答		
69	新しい考え方を学ぶことにはあまり興味がない	1	2	3	4	5	6
70	一生懸命考え、多くの批判的意見が必要とする事業や課題を模索していることには興味がある	1	2	3	4	5	6
71	必要以上に考えない	1	2	3	4	5	6
72	一度考えてしまえばあまり考えなくて済む問題が好きだ	1	2	3	4	5	6
73	長期間にわたって思考することは通常の務めである	1	2	3	4	5	6
74	考えることは楽しくない	1	2	3	4	5	6
75	深く考えなければならぬような状況は避けようとする	1	2	3	4	5	6
76	自分が人生で何をすべきかについて考えるのは好きではない	1	2	3	4	5	6
77	常に頭を働かせるのは満足してない	1	2	3	4	5	6
78	自分の人生は解決しきれない問題が多い方がよい	1	2	3	4	5	6
79	問題や課題よりも感情や関係の方が好きだ	1	2	3	4	5	6
80	問題を考えがちな人の方が面白いと思う	1	2	3	4	5	6
81	もしも思いついたらすぐに他人に話さない限り、問題に陥り続けるのは嫌いだ	1	2	3	4	5	6
82	役に立つから、そう言っておけばよかったと後悔することが多い	1	2	3	4	5	6
83	答えがないような問題はつまらない	1	2	3	4	5	6
84	物事を成し遂げるには、正しい方法と間違えた方法があると考えている	1	2	3	4	5	6
85	知識の量は多くはいいが、それが活かせるまでつまらない	1	2	3	4	5	6
86	初めて学ぶ人がどんな疑問を私に訴えかけてくるか、それが面白いと思う	1	2	3	4	5	6
87	人の考えについていては、困ることがある	1	2	3	4	5	6
88	誰かの人のテクノロジーやアイデアが実行されていると、私は仕事から遠くで羨ましいが、 だとと思う	1	2	3	4	5	6
89	私は自分より知らない人にも話せることができる	1	2	3	4	5	6
90	明確な課題があれば、私はうまくいくものだ	1	2	3	4	5	6
91	件数や人数や金額が関係する問題	1	2	3	4	5	6
92	自分のコントロールできなくなるような状況は好きだ	1	2	3	4	5	6
93	チームメンバーに会うと、何を話しているのかわからない	1	2	3	4	5	6
94	自分の仕事や周りの人に対する影響を考えると、自分からなりたいと思わない	1	2	3	4	5	6
95	知らない人の多いイベントやコンファレンスには参加しないと思う	1	2	3	4	5	6
96	誰かの人から話しているとき、話を聞いているのが楽しくない	1	2	3	4	5	6
97	周囲の人々についていては、困ることがある	1	2	3	4	5	6
98	第一印象は重要だと思う	1	2	3	4	5	6
99	今と同じような状況に陥っている	1	2	3	4	5	6
100	成功するというのは難しいが、計画を実行に落とし込む	1	2	3	4	5	6
101	今自分が知っていること、経験は役に立たない	1	2	3	4	5	6
102	誰かの人から話を聞いているときは、話している人と同じように話している	1	2	3	4	5	6
103	一度話したら、それが終わるまで他の問題や仕事に集中しない	1	2	3	4	5	6
104	思い通りにできないような状況は、かなり好きになる	1	2	3	4	5	6

3. 自分自身の価値観や考え、もの見方などに周囲の人にどのような影響を及ぼすか？また、それほどの
 ような影響が及ぼすか？答えられれば周囲にお答えください

調査は以上です、ご協力ありがとうございました。